ISSN-0913-1906

阡陵

No. 38

関西大学博物館彙報
平成11年3月31日発行

〔SENRYO・KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT〕

勾玉　Corved Bead

目 次

対馬藩「宗家文書」の調査をめぐって …… 2
展示のたのしみ―たとえば屏風について― …… 4
儀礼のミニチュア文化 …… 6
動物文の頸飾についての補記 …… 8
Museum of Welsh Life ウエールズ民俗博物館 …… 10
山城・銭司(ぜず)遺跡出土の坩堝(るつぼ)・鞴(ふいご)端口(はぐち)の紹介 …… 12
平成10年度　資料調査における出土遺跡の確認調査報告 …… 14
古代エジプトのビール造り …… 15
博物館だより …… 16

関西大学博物館
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号
Tel 06-6368-1171（直通）
FAX 06-6388-9928

対馬藩「宗家文書」の調査をめぐって

泉　澄一

長崎県立対馬歴史民俗資料館…といわれても、ここを訪ねたことのある人はともかく、日本史専攻の方でも知る人は少ないはず。しかし当館は斯界に有名な対馬藩の「宗家文書」（本稿では当館でのよび方「宗家文庫史料」にしたがっておく）を中心に島内旧家の古文書や考古・民俗資料などを収集管理する対馬研究の文化財センター。昭和52年４月に開館し一昨平成９年には20周年を迎えた。同年11月に記念展（「対馬と韓国との文化交流史展」）も開かれ、韓国から里帰りした貴重資料（写真１参照）など見ごたえのある展示品が並び、対馬の特異な歴史的位置を改めて知らしめる好企画だった。

写真１　対馬人信時老（信次郎か）に対する朝鮮国の辞令

ところで私がこの対馬へはじめて行ったのは昭和47年の夏だが、以来今日まで28年間「宗家文庫史料」によりながら、朝鮮との外交文書を司った以酊庵、対馬藩が釜山の和館内で経営した陶窯や対馬島内の陶窯、藩儒であった雨森芳洲などについて研究を進めてきた。その間、昭和50年から「宗家文庫史料」の緊急総合調査が行われ、私も調査員の１人となりその後15年間、自分の研究テーマとは別のことでも対馬へ通うことになった。この調査が「緊急」というのは、昭和40年代の後半に対馬へ大型フェリーが就航したためで、島内文化財の流出が目につくようになり、未整理のままにある「宗家文庫史料」もその対象となる恐れが出てきて、まずその調査と整理が急がれたからである。歴史民俗資料館の構想もそのような環境と機運にあわせて出てきたものだが、それは島民の切なる願いでもあった。調査を終えた「宗家文庫史料」は所有者の旧藩主・宗家から歴史民俗資料館へ寄託される予定で、それゆえ日程に余裕はなかった。

「宗家文庫史料」は明治期の旧藩主家記録が若干あるほかはすべて対馬藩の藩政記録。日記、記録類、書簡類に大別されるが調査はまとまりのある日記（表題には概ね「毎日記」とある）からはじめられた。そのころはまだ歴史民俗資料館はなく大量（約120種類、8000冊）の日記は「宗家文庫」とよばれる文書蔵から当地厳原町資料館の２階広間へ運び出された（調査の事業主体は厳原町、文化庁と長崎県が調査費の¼ずつを負担していた）。広間には寛永11（1634）年から明治39（1906）年まで約270年間の日記の山ができたが、驚愕の想いというより正直いってため息が出た。多種大量すぎて手のつけようがないのである。しかし元へは戻せずとにかく形や大きさ、表紙など似通っているものを選び出したがこれは有効だった。大型で体裁も立派な日記の一山は行政担当役方の記録を受けもつ表書札方のもの、それよりやや小型だがやはり体裁のよいのは内政担当役方の記録を受けもつ奥書札方のもの、全体がいちだんと分厚い日記の一山は人事担当の組頭方のもの、全体に焦げたような感じの日記の一山は郡奉行所のものとわかってきた。しかしこのあとが大変だった。そもそも藩政の機構が不明なうえ、一時期だけの日記が多くあって分類がむずかしく試行錯誤のくり返しだった。それでもなんとか期限の昭和53年２月に目録もでき、8000冊の日記は新築の

写真２　対馬藩の藩政日記

歴史民俗資料館で公開できることになった。日記を主に調査研究をつづけている私はこのうえない利便さを享受することになったが、それは今日に至るまでつづいている。

つづいて記録類（約27000冊）の調査に入ったがこの整理は難航した。畢竟、藩政の機構がわかっていないからだが、それゆえ日記と異なり近代的な分類法によった。調査は前回とちがって歴史民俗資料館で行われたが４期12年をへて４冊の目録ができた。日記につづき記録類も公開されたが、そのとき年号は平成に変わっていた。これで「宗家文庫史料」のうち冊子の体をなすものすべての調査が終わり、それらはいつでも対馬歴史民俗資料館で検索し閲覧できるようになった。かつて「宗家文庫」内での収蔵状況を知るものにとって、これは驚異的なことだった。そのため「15年の歳月が流れ、むずかしい調査の歴史が積み重なった」とは、最後の目録（『宗家文庫史料目録』（記録類Ⅳ））の「あとがき」にある一文だが、それは私自身のことだった。わからないことがまだ一杯あったが調査を通して対馬藩と宗家文書に関する蓄積がずいぶんできた。「むずかしい」といえば、これほど長期の文書整理にかかわったのに「対馬藩」の実像がいま一つ見えてこず、対馬藩はもっとも基礎的なところがまだ解明できていないのでは、と疑問をもつ切っ掛けとなった。そしてこの疑問がのち藩政機構の解明につながり、雨森芳洲研究の際に大切な支柱の一つとなった。

記録類の調査が終わる直前、昭和63年６月に韓国の文教部国史編纂委員会の委員長が来阪し委員会が所蔵する「宗家文書」の調査を依頼してきた。委員会にはかつて朝鮮総督府が宗家から買いあげ「宗家文庫」から運び出した文書（日記と記録6500冊、外交書簡20000点、絵図1500枚、絵巻等40点）があり、その本格的な調査をはじめたのである。だがそれは日本の古文書であり、委員会の職員にそう簡単にわかるはずがない。そこで私を招いたのだが翌年にかけ３か月、日記、記録類を調査した。それらはかつて対馬歴史民俗資料館の日記や記録類とは一体のものであったから、計らずも私はその全体像を知る幸運に恵まれたわけで、これはその後の研究に大きな糧となった。なお委員会では朝鮮総督府から「宗家文書」を引き取って以来、現在でも職員にさえ自由な閲覧を認めていない。そういう文書を私は委員会の書庫の中で調査したのだが、私のような日本人はほかにはいない。

さて「宗家文庫史料」の調査には最初から懸案が一つあった。それは10万点とも推計される書簡類の調査に関してで、記録類の調査中から行政当局へそれを申し入れておいたが、回答を得られなかった。なにぶんにも時間とお金のかかることである。そのためダンボール60箱につめ込まれた書簡類は、資料館へ運び込まれたままになっていた。ところが近年、宗家が「宗家文庫史料」の売却を申し出たこともあって急遽、書簡類の調査の必要が生じてきたのである。３年前の平成８年７月、雨森芳洲に関する調査で資料館にいた私にその相談が持ちかけられた。私は雨森芳洲研究の原稿執筆直前だったので調査を断ったが、県の教育委員会も必死である。結局、都合のつく限りと引き受けたが、折から資料館へきていた大学院生（Ｄ２）岡井健司君に話したところ、他の院生にも声をかけてくれ同年12月から調査に入った。院生３人、学部生１人が参加し、これまで６回（６週間）、約8000点の文書の調査を終えた（約4000点については目録ができている）。

調査は平成10年４月から長崎県教育委員会の新規事業（５年計画）として続行が決まった。まもなくその初年度を終えるが昨年から辰巳大輔（４回生）、吉川潤（２回生）の両君が加わり、朝９時前から夕方５時過ぎまで、みな全力をあげて古文書と格闘をしている。休憩時間も少ないのに誰も文句をいわず資料館の方々も驚きの眼。関大生の評価はすこぶる高い。ところで書簡類（資料館では一紙物とよんでいる）とはいうが「書簡」といえるのは全体の２割ぐらい。ほとんどは覚書や書付、願書や伺書などで内容は千差万別、開けてみないとわからないのが実状である。正直いってむずかしいが、これだけ大量でしかも内容がある未整理の藩政文書は、もうほかにはあるまい。それゆえこの意義ある調査にあと４年、全力でとり組む所存だが、心ある学生諸君の是非なる協力を期待している次第である。なお、これまで調査に協力してくれた諸君はつぎの通り。木村修二（Ｄ３）、森元純一（Ｄ１）、広畑元一（Ｍ２）、岡本健一郎（現、広島大院Ｍ１）

展示のたのしみ―たとえば屏風について―

井　溪　　明

博物館ではおおくの歴史資料に加えて、美術資料として位置づけられる資料もそれなりに展示される。この項では、これら美術資料のうち屏風の展示について少し述べてみたい。

通常、屏風の展示は、ジグザグの山谷状に折り曲げて両端下を屏風止めで支えるか、パネル状に伸ばして壁面に金具で留めるかの二通りである。構造面や強度・保存上では前者の方がより望ましいことはいうまでもない。ただ描かれる内容によりパネル状も決してだめというわけではない。現在、状況はやや変化しているが、関東方面での屏風展示は後者のパネル状が多かったようである。

このことは屏風が、内容が重視されてきた事によるのである。しかし屏風は基本的に風塞ぎや間仕切りのための調度である。その用途上どのように用いられていたかというと、例えば画中画に描かれる屏風はきわめて多彩な用いられ方となる。そこでは前者二通りはもちろん、端二扇のみが折り曲げられたり、丸く囲んで立て回されたり、極端な場合は山谷が逆に折られたりもする。むろん博物館でこのような展示が通常はかなうわけではない。しかし工夫次第によって屏風の持つ多機能的な面を展示に反映できることがあるのではないかと思える。例えば、描かれている内容により単純にジグザグに並べるのではなく、山谷の角度を変えてみたり、並列や角を直行させたりなどが考えられる。今日のように屏風に画家が好きな画題を自由に描けるという事はほとんど考えられない時代において、絵師は注文主の意向をくみ取り、その屏風が主として用いられる場所や、その主、さらには「晴」と「褻」についても十分に承知した上で見合う絵柄や構図を描いていった事は予想できる。むろん屏風は可動性のある調度であるから必ずしも固定的な場所で用いられたとは限らないまでも、主として用いられる場所は想定されていたといえよう。そして絵師は、描く対象、例えば四季草花のような場合、どのように配するべきかを入念に検討する。その際、絵師の独自の判断だけではなく、アドバイザー的な役割の人物もいた可能性があるかも知れない。図版などで屏風絵を見ているとあまり気がつきにくいことであるが、実際に屏風を前にしてしばし眺めていると、その描かれ方になにがしかのルールのようなものが見えてくることがある。特に山水図屏風などで気がつくのは、各扇の出入りをかなり意識しているということである。

二次元空間に立体的に事物を描くについて、西洋では遠近法という理論的手法が採用されたのに対し、日本では技法上の工夫はもちろんで

洛中洛外図（左隻）

あるが、加えて屏風のもつフレキシブルな特性をも生かして空間を立体化したのではないかとさえ思えてくる。あの有名な長谷川等伯筆の国宝「松林図」を見ても、図版的に二次元で見る場合それほど奥行観はない。しかし実際に東京国立博物館展示室で山谷におかれた屏風を見ると、濃墨と淡墨による松群の「おぜ（蝶番部）」に沿った描かれ方が、全体の遠近感を見事に演出しているのを見いだしうるであろう。そしてこの折れの角度により霧に靄う松林の空間が豊になってゆくのである。絵師等伯の計算し尽くされた技量の冴えを余すところなくみせつけられるであろう（あまりにも有名な図ですが、さて皆さんはどう思われますか）。

少し話は横道に逸れたが、ここで考えてみたいことはこのような作品を展示するとき、単に山谷ではなく、主観的であるが絵を読みとってもう少し展示の工夫があっても良いのではないか、あるいは「遊び心」があっても良いのではと思う。むろん特別展などで所蔵者の貴重な資料を借用しているときはそうもいかないであろうが、館蔵資料などの時には思い切って色々と工夫をしてみることが必要ではないかと思える。

堺市博物館には慶長末から元和初の時期に位置づけられる「洛中洛外図屏風」（六曲一双）がある。右隻は、大仏殿を中心に黒谷から東山の社寺景観と御所、さらに中京の祇園会風景。左隻は二条城を中心に北山から嵯峨西山の名所景観をそれぞれ描いている。この展示について、地理的環境や景観重視の観点で考えるならば、普通にするように左右に広げて並べるのではなく、少なくとも左右隻を直角位置に置くべきであるとして筆者は展示している。本図のように南北で左右隻を分割した場合、その立て回しはこのようにするか、あるいは向かい合わせにでも置かれたのではないかと想像する。

大胆とも、あるいは通念的には邪道とも取られかねない事ではあるが、屏風によっては思い切って絵巻物などに見られるように湾曲させて展示してみたり、山谷の角度の深浅を変えてみるとかの展示を試みることがあってもよいのではないかと思う。そうすると今まで見えなかった様々なことがらが見えてくる。と同時に、絵師の意図とは異なるかも知れないものも見えてくる。むろんこれは単に学芸員の自己満足ではなく、このようなことを絵師は想定したのではないかという説明がそれなりに付けられるべきではあるが。

屏風に限らないことであるが、資料をどのように展示するか、これはひとえに学芸員の資料についての知識と洞察にかかっているといっても過言ではない。またこのことは、学芸員の密やかな「楽しみ」の部分でもある。ああでもない、こうでもないという試行錯誤。この面白さを楽しまないようでは…、と筆者などは思ってしまう。むろんそれは観覧者に対してわかりやすくあるということが大前提ではあるが。恭しく資料を展示するのではなく、新しい価値観をどのように分かり易く資料に付加してゆくか、このことは学芸員に課せられた新たな資料展示の課題でもあろう。　　（堺市博物館学芸員）

洛中洛外図（右隻）

儀礼のミニチュア文化

上　井　久　義

博物館の展示品として滑石製模造品を見かけることが多い。鏡や小刀のミニチュアを滑石で造ったものである。他に土器やカマドのミニチュアもある。何のために作られ、どのように使用されていたのか興味をいだかせるが、実情はわからない。時には子供の遊びに使われたのかも知れないと思われもする。

志摩半島南部に位置する南島町で山の神の神事を見学したことがる。鳥居に大きな注連縄が張られ、ここに板で造った数々の農具のミニチュアがぶらさげられていた。ここは漁師の町で、神前に三方にのせた魚が色々と供えられてあった。漁労を生業にしている人たちであるから、さぞ生きのいい魚が供えられているだろうと思っていたら、これが板に魚の絵を画いて造ったミニチュアであった。豊かな海の幸にめぐまれた人たちのすることにしては予想外のことであった。

京都府南部にある祝園で、御田植祭を見学したことがある。青年２人が小さな唐櫃をかついで神社を出発し、祭祀田と見なされる土壇におもむく。ここで神主が田をすき、モミをまく農作業の仕草を演じる。このときに使う農具一式がこの唐櫃におさめられている。スキもクワもミニチュアである。実物大であればスキなど神主１人で使うことができないが、ミニチュアであるから作業はさっさとすすんでいく。大田植とか御田植祭には、特定の水田で実際に稲を植付ける祭礼が多い。これとあわせて年のはじめに田植にさきだって神社の拝殿や境内の一部を水田に見立てて、予祝行事としての田植をする例も多い。実際に田植をするわけではないので稲の苗が松の小枝であることもある。大阪の杭全神社の御田植祭では、スキは実際に使用されているものと同じだが、クワは刃の部分も木製のフログワである。つまり本来は実用の農具も儀礼のみで使用されるようになると、見ためでそれとわかれば実用にたえる道具である必要がなくなるわけである。

結婚する少女の足先への化粧

正倉院に伝来した「子日手辛鋤」は、とても実際に土をすくのに使われたとは思えない小振りな農具である。伊勢神社で二月子日に予祝の御田植祭が行なわれたように、宮中での予祝行事として御田植祭が行われ、この時にこの鋤で田をすいてまわる仕草を演じた際に使用されたものと考えられる。

研修の期間をいただいてネパールの民俗にふれる機会があった。この際、ネワールの少女たちがシバ神と結婚をする儀礼に立会うことができた。ネワールの女性は、一生で３度結婚をする。最初は７・８歳頃にまずシバ神と結婚する。２度目は12・３歳頃に太陽と、そして３度目に男性配偶者との結婚をあげる。

方形の中庭を囲んで建てられた６～８階建のビル内に、同族の者が集まって生活をしているので、この住民のなかからほぼ同じ年齢の少女たちが申し合わせて結婚式をあげる。中庭に牛のフンと赤土をまぜて方形にぬりあげた神聖な祭場がもうけられ、ここに供物を置く祭壇や僧侶の席、結婚する少女たちの座がもうけられる。儀礼はまず僧たちによって少女の頭に聖水が注がれる。次に足で石皿の上の石棒をころがして豆を砕く所作をする。ネパールでは各家に、溝がほられた約40センチ四方の石板と、この上をころがす石棒があり、これを両手で石板の上をころがして穀物を粉末にする調理具がある。この結婚式ではこのミニチュアを足で操作する。次いで足の甲のつま先部分を赤く化粧をしてもらう。この化粧は少女が成人した女性になった

ことを象徴する形であろうし、石臼で石を砕くのは、主婦としての調理を行なうことを参加者に認知させるためのものであると考えられる。

祭場のほぼ中央には供物が置かれ、そこにミニチュアのカマドが置かれ、小さな水をいれる壺や食物を入れる土器がそえられ、竹製の小さな弓と矢が置かれている。

ネワールの少年は、10歳余になると成人式をうける。ハレ着としてのフンドシを身につけ、弓矢を持って寺院から裏山に駆けこむ。これを少年の母方のオジが後を追うことになっている。弓矢を持って山に入ることは狩りに赴く姿を演じたものである。獲物をしとめて、はじめて1人前の男として認めるとする形を儀礼として演じた姿であろう。これに付き添って獲物をえたことを確認するのは父親ではなく母方のオジなのである。

少年は成人をした証しに頭髪を剃る。まるで僧形の様であるが、日本の民俗にも類例がある。生まれた赤子の頭髪を剃って子供の仲間入りをさせてもらう通過儀礼である。頭髪を剃ることによって、従来の年齢階梯制の要素を拭いさったことを表明した姿なのであろう。剃り落とした髪は、花籠のようなきれいな皿にのせられて谷川に流しさる。この役目を務めるのが母方のオバときめられている。少年の成人式も、数人の子供たちがよって合同で行なわれるのが普通の姿であるから、この時には数名の母方オバが集まってにぎやかに髪を流しさる行事が行なわれることになる。そして少年の母親が儀礼上で担う役割は、少年の父親と同様になにもないのである。少年が成人したことを喜ぶ儀礼を準備するのはその両親であるが、儀礼の上で必要不可欠な役を演じるのは少年の母方オジとオバなのである。

少女の成人式では、儀礼の場で常に少女に付き添っているのは少女の母親である。また僧侶から祝福を受けるとき、その父親の膝にだかれて杯を受ける。少女が成人したことを祝ってくれるのは父親であり母親なのであるが、少年が成人したことを認めてくれるのは母方のオジとオバである。成人する少女の父親には、姉妹がいる。そしてその男児たちの成人式に立ち会う義務も課せられている。少女の成人式に並べられたミニチュアの調理具は、彼女が結婚したら使用するであろう世帯道具として会場に並べられたものであろう。これにそえて置かれた弓矢は少女が使う物ではなく、その夫が使用する品である。そしてそれには、彼女の父の姉妹の息子が成人式のときに用意された矢とイメージの通い合う品なのである。

シバ神と結婚する少女たちと父親

儀礼の場で使用されるミニチュアは、見た目でそれとわかる品でありさえすれば事たりる。一見稚拙と思える品で充分なのである。むしろその方が儀礼としては成熟した姿である。少女の結婚式に置かれたミニチュアの弓矢は、彼女が結婚するであろう少年の成人式で用意された弓矢を象徴し、彼女の親がそのことを見届けた品に通じるものである。そして少年の親族と、そのオバ方親族との連帯を深め、母方交差いとこ婚優先の社会構造を儀礼世界の中に含みもたせている姿とも見ることができるのである。

ミニチュアの祭具

動物文の頸飾についての補記

網　干　善　教

（1）

1999年1月23日から3月22日の約2ケ月間にわたって神戸市立博物館で「唐の女帝・則天武后とその時代展」が開催された。この展覧会は東京都美術館、神戸市、福岡市、名古屋市博物館での巡回展であるが、今回の展示品の中に注目すべき遺物があった。それは展示図録P．86の47―(1)、(2)に掲載されている金製の龍、鳳凰文の彫金の文物である。これについて『展覧会図録』では次のように解説している。

1971年、陝西省西安市東郊郭家灘出土、金、鍛造、貴石象嵌

(1)　高4、長9.6cm、厚0.4cm

(2)　高6.8cm、幅7.0cm、厚0.5mm　(3)(4)略

唐　8世紀

陝西・西安市文物保護考古所

いずれも、金の薄板を打出し、外形に沿って切り抜いて成形する。表面に金糸や金粒を溶接し、装飾しているが、（中略）鳳凰、龍、（中略）の姿は生動感に富み、（中略）同じ地点から出土し、同様の作りになることからすると、本来、何らかの装飾として一緒に用いられたのであろう。鳳凰は同形同大のものがこの他にもう1点、同所から出土している。

（2）

さて、この龍、鳳凰について私見は次の如くである。

西安郭家灘出土龍文
『唐の女帝・則天武后とその時代展』図録

(1)の資料の龍を表現した遺物をみると、S字形に曲折した頸部にX字状の彫刻がある。これは一種の頸飾と考えられる。次に(2)の資料の鳳と凰の一対を表現である。どちらが鳳でどちらが凰であるかよく分からないが、表現の違いとしては(上)は頭部を上げ、左脚を上げる。対して(下)は双脚を揃える。金具として器物に取着けるための釘穴の位置も、羽根の上げ方も、尾の表現も異なっている。この鳳凰文の頸部にも龍文の場合と同様にX字形の文様が施されている。こうした文様は従来あまり注目されていなかったが、昭和47年（1972）3月：奈良県高市郡明日香村平田に所在する高松塚古墳の壁画の青龍図に描かれていたことから、この文様の類例を中国、朝鮮、日本で収集し、『関西大学博物館紀要』第4号（平成10年3月）に「四神図の頸部装飾とその類型」と題して発表した。今回の展覧会に出陳された中国西安市出土の文物もその一例である。

（3）

高松塚古墳の発掘調査中、最初に横口式石槨に入って、天井の星辰図、側壁の日月、四神、人物群像を確認した際、東壁面中央に描かれた青龍図の頸部に赤色の帯に黄色のX印の文様があるのに気付いた。青龍図である故に青色を基調として彩色された龍の体躯に表現された鮮やかな赤色は鮮明であった。ただ、その時から、この文様の類例なり意義に関心をもった。

それ以後しばらくして同様の文様が奈良西ノ京薬師寺本尊の台座の青龍図にあることを知り、それが薬師寺と高松塚古墳の年代や関係を示唆するのではないかとも考えてみた。そのあと、この文様は高松塚古墳や薬師寺本尊台座にみられるだけでなく高句麗の壁画古墳、さらには唐の長安の都のあった西安市周辺の壁画にみられ、加えて青龍図にあるだけでなく朱雀、白虎、玄武図にもあり、それ以外にも西安法門寺地宮の第一道石門の上の朱雀門楣の彫刻にも相対する鳳と凰像があり、その頸部を観察するとX印の文様があることが分かった。加えてその文様か

西安郭家灘出土鳳凰
「唐の女帝・則天武后とその時代展」図録

ら火焔形の宝珠文が靡いており、これと同種のものは薬師寺本尊台座の青龍図頸飾や正倉院宝物の紫地鳳形錦御軾の一羽の鳥（朱雀か鳳か凰か）の頸部装飾にもあることが分った。こうした特殊な特徴のある文様は多元的に発生、発案される意匠ではなく、文化の伝播や交流過程において波及するであろうと思われた。(注１、２)

（４）

このような龍文あるいは朱雀図などに共通の文様があることを知るためより多くの資料の収集につとめた。その結果、中国東北地区鴨緑江中流域、一時、高句麗の都が営まれた吉林省集安（輯安）に所在する壁画古墳四神塚の青龍図にも同様な頸飾があり、さらに西安の唐乾陵の無字碑の昇龍図、あるいは唐長安城大明宮跡出土と伝えられる磚の文様にもあった。そうした種類の文物だけではなく江蘇省丹徒県出土の「龍紋銀盒底」などにも同様の頸飾があり、これらにも薬師寺本尊台座や正倉院宝物錦御軾の鳥文と同様火焔宝珠形の文様が見られた。

前述の如くＸ字文を有する頸飾の類例は青龍文（龍文）の他、朱雀、鳳凰文、鳥文にも多くみられる。さらに白虎図や玄武図にもある。白虎の例は西安市東郊韓森寨に所在する劉士准墓の白虎図にある。この墳墓は大中４年（850）に築かれ、1956年に発掘された。

次に玄武図での類例としては天宝４年（745）に歿し、万年県長楽原に埋葬されたという蘇思勗墓や天宝15年（756）に死去し、長安東郊に埋葬された高元珪墓の壁画にみられる。蘇思勗墓は1952年に西安市外緯十路で発見され、墓室と甬道に約20面の壁画があった。

高元珪墓は1995年、高楼村で検出され、墓室、甬道に四神図をはじめとする壁画があった。この２例はいずれも墓室北壁に描かれた典型的な玄武図であり、図像としては亀に絡まる蛇の頸部にＸ印の文様である。

こうしてみると今回展示されている龍文の装飾金具も西安市東郊の出土であり、製作年代も８世紀と考定されているから唐文化を象徴するものとみてよい。

（５）

動物文の頸部を装飾する文様はこのＸ字形（第１類型）のほかに復線の斜格子文を表わすもの（第２類型）と輪状を表わすもの（第３類型）とがある。そのうち第１類型は西安市南部何家村から出土した舞馬銜杯裏式銀壺や双鴛銜綬紋銀盒などの帯状の文様に見るＸ字文と共通するのではないかとの考えをもっている。勿論これは一つの推察であって確証を得たものではない。しかし、高松塚古墳で見た青龍図と同じ意匠の文物が、唐の都西安、高句麗の都集安、そして飛鳥桧隈に遺存することと、文様が極めて共通することは、そこに文化波及の実像をみることができるのではないか。

なお、青龍、白虎図の姿態をみると尻尾を後方にのばしたものと、後脚に絡まったものがある。前者は薬師寺本尊台座や高句麗江西大墓の青龍、白虎図、後者は高松塚古墳の青龍、白虎図やキトラ古墳の白虎図、西安劉士准墓などでみられる。確定的ではないが図像的には前者の方が古く、後者の方が新しい形式であろうか。

注１　網干善教「高松塚壁画の難解五題」『阡陵』№34　関西大学博物館（平成９年）

注２　網干善教「中国法門寺地宮朱雀門楣の彫刻」『阡陵』№36　関西大学博物館（平成10年）

Museum of Welsh Life
ウエールズ民俗博物館

山　口　卓　也

イギリスは、その正式な国名が「連合王国」となっていることから知られるように、いくつかの異なった歴史的・文化的地域から形成されており、ウエールズもその一つである。ウエールズは、前キリスト教文化やケルト文化の伝統、独自の言語の存在など、イングランドとは異なっている。現在でも地名表記がウエールズ語と英語の両表記となっていたりして、今でも独自の文化・伝統を尊重しようとする姿勢がはっきりと見られる。

ウエールズ民俗博物館は、「連合王国」のウエールズの首都カーディフから北西15kmの郊外、セントフェイガンズ（St. Fargans）にある広大な面積の野外博物館である。ウエールズ民俗博物館は、カーディフのウエールズ国立博物館の分館として設立され、ウエールズの民俗と生活文化に関して、特に建築物を野外に移築して公開・展示することを目的としている。筆者は、98年夏に訪問する機会を得たので、その概要を報告したい。

ウエールズ民俗博物館は、大規模な屋内展示施設と、20ヘクタールを越える広大な面積に広がる野外展示からなっている。移築された建物には、各時代の農家、納屋、干し草小屋、豚小屋、鶏小屋、牛小屋、製粉所、通行料徴収所、パン焼き所、郵便局、闘鶏場、仕立屋、製陶所、革鞣製作所、ハリエニシダ製粉所、木材製材所、採掘工会館、炭坑夫住宅、鍛冶屋、小学校、馬具製作所、教会、毛織物工場、船網小屋、リンゴ酒工場、馬車小屋、樽製作所、木靴製作所など40数棟がある。建物の間隔は広く、なだらかな丘陵に森や牧草地、麦畑や野菜畑を配しており、相互に時代背景の異なった施設が視野に入らないよう配慮されている。また、考古学的な研究から復元したケルト村や、もともと16世紀に建築され、その敷地が現在のウエールズ民俗博物館となったセントフェイガンズ城の居館や庭園がある。

写真１は、ウエールズ南西部の17世紀の農家で、室内には1790年頃に設定された家具が揃えられている。訪館したとき８月初旬にもかかわらず雨が降って肌寒い気候であったが、常駐の館員により暖炉に火が入れられて室内は暖かった。暖炉の横に設えた箱形ベッドは乾いて心地よいし、台所には什器が揃えられており、生活臭も漂う。二階に上がって窓から外を見ると、畑と牧草地を隔てた200mほど離れた木立の中に別の建物があり、その煙突から煙が上がってたなびいているのが見え、この民家が周辺と一体化して「生きてる」ように感じられた。

写真２は、考古学的に再現されたケルト村で、いくつかの住居の炉には火が入れられ、また、集落内には鶏が放し飼いとなっている。ゴミ捨場所も貝塚として作られており、ケルト人の集

写真１　ケニクストン農家

写真２　ケルト村

写真3　野鍛治

写真4　製陶所

落に迷ったような雰囲気が味わえる。

多数の館員と博物館ボランティアによって、それぞれの建物や広場・畑や牧草地でアトラクションや実演が行われている。実演だけではなくパン焼き小屋では焼かれたパンが売られ、郵便局では郵便物が出せる。写真3は露天で行われていた野鍛冶の鉄炉、写真4は19世紀の製陶所での実演で、制作された陶器は即売されている。豚小屋や鶏小屋には、実際に家畜が飼われているし、牧草地には羊や山羊、牛が放牧され、その世話も見学することができる。また畑には麦などが植えられ、農作業も観察できる。特筆できるのは、建物の移築作業を見ることのできる点であろう。

またそれぞれの建物でのイベントも行われる。訪館したときには、18世紀のナントウオールテラ・コテッジの火の入れられた炉端で、ボランティアによるウエールズ民話の「語り」が行われていた。博物館全体の大きなイベントとして、旧五月祭りや6月のケルト民族のフォークダンス祭り、グーウイル・イヴォン（Gwyl Ifan)、9月の収穫祭も行われるという。

ウエールズ民俗博物館において、どの建物も、どの広場・空間も出来るだけ「動き」を持たせようとしていることが理解できる野外展示となっている。

さらに、ウエールズ民俗博物館の展示施設には、ウエールズの農業技術の発展に関する農業展示館、18世紀からビクトリア朝末にかけての衣装、ドレス、アクセサリーを展示する衣装博物館、ウエールズの家庭、社会、生活文化に関する展示をする大規模な道具文化展示館があり、室内展示も充実している。

ウエールズだけでなく広く「連合王国」において、現在でも各地で古い建造物が現役で使用されており、ふつうのB＆Bがチューダー朝の建物であることなどしばしばある。生活習慣の保守的な「連合王国」にあっては、今も数百年間の各時代の建物がそれぞれ実際に機能していた風景がそのまま観察できる。次第に古い生活文化は失われつつあるが、その「場所」としての建物は多数残っているのである。

ウエールズ民俗博物館は、ウエールズにこのような優れた文化財環境があることを前提とし、それら建物の代表的なものを博物館内に移築して、ウエールズの民俗と生活文化の「動態」として展示し、来館者にまとめて観察できるようにしようとしたものである。夏季休暇期中でもあり、小学生の団体や子供を連れた家族が多く訪館し、館員・ボランティアの実演に見とれている姿が見かけられた。筆者には建物の「動態展示」が面白く感じられたこと、ウエールズ民俗博物館と来館者自身にもウエールズ固有の生活文化尊重の明確な姿勢が感じられたことから、大変興味深い博物館であった。

ウエールズ民俗博物館は、ウエールズ語ではAmgueddfa Werin Cymruと表記されるが、筆者には発音困難である。住所は、Museum of Welsh Life, Welsh Folk Museum, St. Fagans, Cardiff, CF5 6XB, Wales, UK.
TEL：(01222) 397951、ウエールズ国立博物館のホームページはhttp://www.cardiff.ac.uk/nmgw/mwl/mwlhome.htmlである。

山城・銭司遺跡出土の坩堝・鞴端口の紹介

丹　野　　拓

銭司遺跡は京都府相楽郡加茂町大字銭司小字金鋳山に位置する鋳銭遺跡である。遺跡は恭仁宮からは東に約2.5km、平城京からは北西に約10kmの位置にあたる。『日本三代実録』貞観7（865）年9月26日の条「山城国相楽郡岡田郷旧鋳銭司山に於いて銅を採らしむ」に存在の知られる鋳銭司に比定され、山城鋳銭司、あるいは岡田鋳銭司と呼ばれている。その設置時期は栄原永遠男氏によると、天平7（735）年と考えられている。

銭司遺跡は明治の初め、坩堝や和同開珎が相次いで発見されたことから、その存在を知られていた。そこで、京都府史蹟勝地調査員であった梅原末治氏は、大正12（1923）年に発掘調査を実施した。また、昭和49（1974）年には加茂町教育委員会により国道工事に伴う調査が行われ、炉跡などが検出された。両調査の成果は、それぞれ『京都府史蹟勝地調査會報告第四册』、『銭司遺跡』において報告されている。

さて、本学博物館所蔵の銭司遺跡出土資料は大正3（1914）年に本山彦一氏が金鋳山の東南隅の竹薮を発掘し、得た遺物を譲り受けたものである。坩堝片、鞴端（羽）口片、銅滓、土器片からなる。完形品はなく、坩堝11片、鞴端口18片が確認できる。

銭司遺跡出土の坩堝は、前述の報告書により、坩堝は単純な口縁のもの、帯状口縁のもの、前二者より薄手のもの、の三型式に分類されている。しかし、資料数が少ないため暫定的な分類にとどまり、本学博物館所蔵品に当てはまらないものが多い。そこで、まず当館所蔵の坩堝を四つの形態に分類しここに紹介する。

①は単純な口縁をもつものである。外面に精良な土を用いて仕上げているが、口縁付近と底部では剝落している。口縁端部から内面には銅を多く含む暗紫色の付着物が薄くこびりつき、その上層には鉄を多く含む黒色の塊状の付着物が残る。他に同一形態の資料1点がある。

②は口縁が帯状とまではいかないが、内側に三角形状に角張るものである。同様の形態のもの1点を所蔵する。なお、①についても、部分的に口縁が膨らみ②に近い形態をなしているといえる。

③は口縁端部に1.5cm弱の平坦面をもつ。口縁付近の厚さは約2cm、底部付近は3cmを越える。図示した断面部分は幸い付着物が少ないが、口

写真1

縁の内側5㎜ほど下から底部にかけて全面に黒色の気泡の痕跡の残る付着物が付着している。付着物の表面に一部緑青がみられる。この型式の完形品として、喜田常太郎氏が小字「和銅」で発見した坩堝があげられる。口縁に平坦面をもつ形態は従来設定されていなかったが、長門・周防の鋳銭司遺跡の資料に多く見られるので、注意が必要かと思われる。

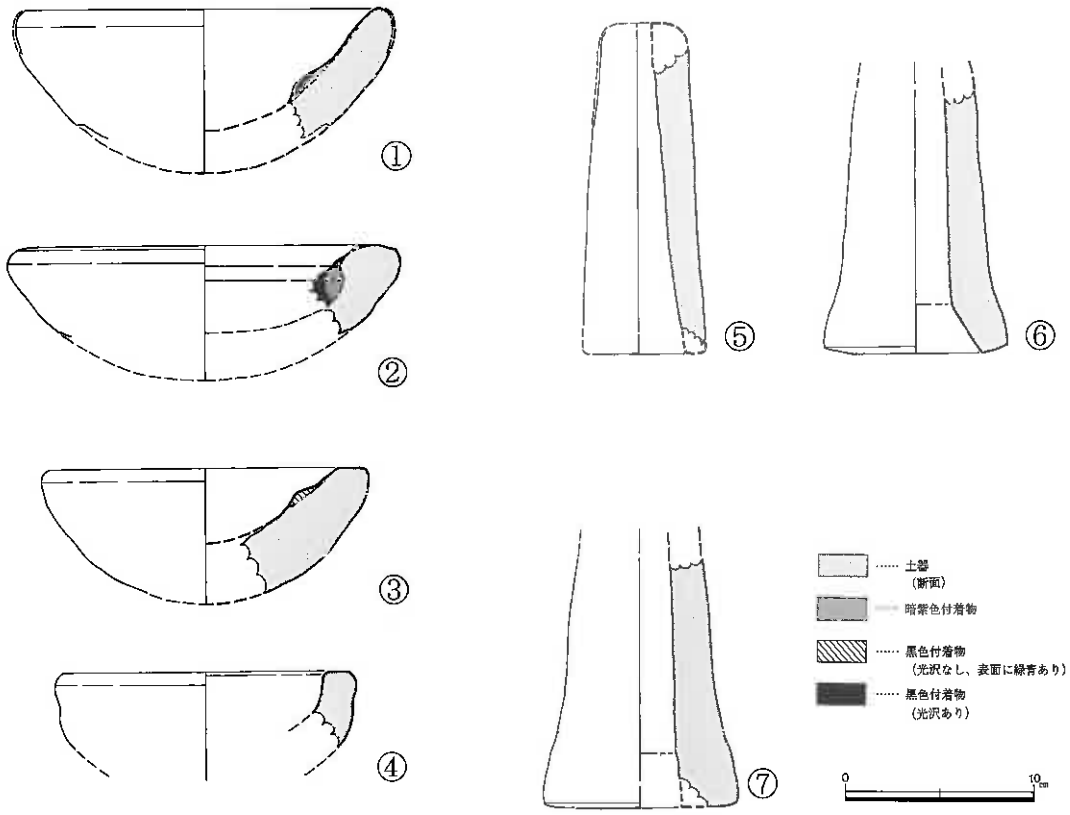
④も口縁端部に平坦面をもっている。③よりは薄く、従来薄手と分類されているものよりはやや厚手の作りである（口縁付近で厚さ2.0～2.2cm）。その口縁外壁には、指頭圧痕がくっきりと残っている。同様の資料が他にも一点あるが、共に坩堝として使用された痕跡は無い。

坩堝内に付着する銅滓の分析は『銭司遺跡』に詳しく、現在の精錬技術と比較し、厚手の坩堝（①～③に相当）は銅の原料に珪酸を加え鉄分を除去する溶錬の段階に使用し、次いで薄手の坩堝（④に相当か）では、珪酸は加えずに製銅の段階を行なった可能性が指摘されている。

次に、鞴端口について紹介する。鞴とは製・精錬に際して送風を行なう装置であるが、熱を受ける通風口には土製の端口を取り付ける。写真の右隅の鞴端口に示したように、先端部に銅滓が付着している場合が多い。端口は筒型のものと考えられるもの（図⑤）1点と、朝顔型に基部が開くもの4点を所蔵している。後者は基部内面にくっきりした段を持つもの（図⑥）と、段がはっきりしないもの（図⑦）がある。なお、実測図については、⑤を除き、回転復原を行なった。

また、本学博物館では他に、長門鋳銭司跡に比定されている山口県下関市覚苑寺境内出土の資料を所蔵している。資料には坩堝・鞴端口・和同開珎の笵型があり、山城銭司遺跡出土資料と共に、その有する価値は大きいといえよう。

（関西大学大学院生）



実測図1

平成10年度　資料調査における出土遺跡の確認調査報告

山　口　卓　也

関西大学博物館では、各地の遺跡を踏査し、関西大学博物館の展示・収蔵資料における出土遺跡の調査を行い、資料研究を進めている。今年度は香川県北部のサヌカイト原産地の踏査を行った。平成10年10月23日（金）に香川県綾歌郡国分寺町所在の国分台周辺のサヌカイト原石露頭および遺物散布状況を観察した。

23日は、朝からの雨のため遺跡踏査を行うには困難があり、当初予定した国分台・朱雀台・蓮光寺山の３地点のうち、徒歩登山の必要な国分台と朱雀台の２カ所の踏査を断念し、蓮光寺山を中心として観察した。

蓮光寺山には、旧石器時代の石器生産遺跡があり、多量の遺物が散乱していることを確認した。特に農業試験場内の蓮光寺山第７地点では、後期旧石器時代の石器生産資料がまとまって存在することを確認した。盤状剝片、翼状剝片石核、翼状剝片、ナイフ形石器、槌石などが認められ、多量の調整剝片や砕片も存在していた。遺跡は、農業試験場の南向き斜面の果樹畑に露頭しており、覆土はほとんど失われているが、遺物量の特に多い直径10mほどのまとまりが認められた。

後期旧石器時代の瀬戸内地域の石器群は、サヌカイト石材の利用と横長剝片剝離技術に技術的基盤をおく瀬戸内系旧石器であるという特徴がある。サヌカイト石材は、大阪・奈良府県境の二上山北麓、香川県北部の国分台周辺の二大産地の他、淡路島北部などにいくつかの産地が知られている。この二つの原石産地を中心として瀬戸内系旧石器文化圏が形成されている。

瀬戸内系旧石器は、伝統的に原石産地と遠方の石器消費地間で工程分割する石器生産の「異所展開」を行って、遠隔地での携帯石器類の重量軽減を行っている。原石産地では一貫した石器生産を行うものの、遠隔地には原石や盤状剝片石核といった重量のある原素材ではなく、石器製品と目的剝片、剝片素材の石核などを搬出している可能性が高い。

蓮光寺山第７地点など香川県北部のサヌカイト原石産地遺跡からの石材搬出状況を把握する調査研究を続けたい。

国府台　遠景（南から）

蓮光寺山第７地点

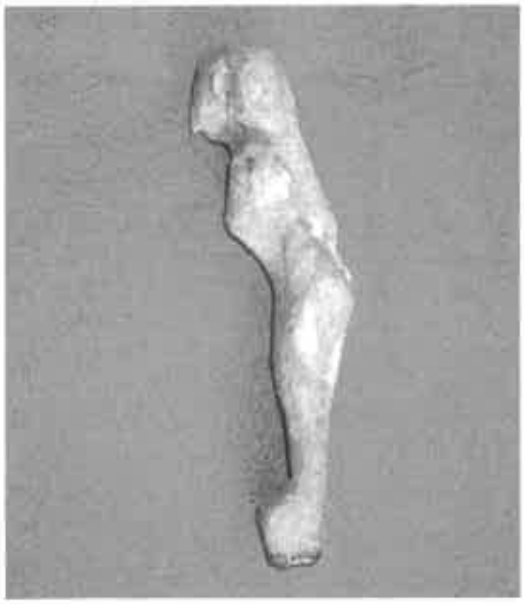
遺物散布状況

古代エジプトのビール造り

道前　博

関西大学博物館のエジプトコレクションのなかに1体の木製人形ある。この木像は、故木村健助名誉教授がエジプトのギザの付近で入手されたもので、加藤一朗名誉教授の手を経て当館に寄贈された資料である。高さ18.2cm、かすかに着色された痕跡が残っている。腰布をつけ、上半身は裸のようである。長い髪と胸のふくらみから女性の像であることがわかる。腰を曲げ、かがみ込むような姿勢で何らかの作業をしているところだろうが、両腕が失われ、付属品もないため、作業の内容は特定できない。しかしながら、ルーブル美術館の所蔵する中部エジプトのダラで発掘された像や、カイロ博物館にあるギザやサッカラから出土した像など第5～6王朝に作られた石灰岩に彩色された像と比較して、その腰の屈め具合からビール造りの作業をしている召使の人形ではないかと推測することができる。この種の像は、貴族の墓の副葬品で、古王国時代には、石灰岩を刻んで作られることが多く、中王国時代になると木製の人形が作られるようになる。死者が現世と同じ日常生活を送ることができるよう、主食のパン作りなど日々の様々な労働作業をしてくれる人形たちである。本資料もおそらく、貴族である墓の主が来世でも好きなビールを思う存分飲めるように、他の日常生活の労働模型とともに副葬されたものだろう。

古代オリエントでは、ビールは葡萄酒とともに代表的なアルコール飲料であった。エジプトでも第5～6王朝の頃から数種類のビールが造られるようになり、なかでも黒ビールが最も愛されていたようである。古代のビール造りは、現在の醸造方法とはだいぶ違っている。注口のついた大きな甕の上に笊状の器を置き、大麦から作られた生焼けのパンにナツメヤシのジュースなどを加えて捏ね、濾して溜まった液に水を加えて醗酵させた。今日のビールのようにホップのきいた澄んだ液体ではなく、醗酵したパン屑が浮いた不純物の多いドロッとした飲み物で、少し甘みがあり、アルコール度も低く1～3％と推定されている。



木製人形

ビール造りの召使（ルーブル美術館蔵）

博物館だより

◇平成10年度　関西大学博物館　開館日数・入館者数（入館者数は３月26日現在）

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	24	22	19	17	5	21	18	12	13	10	17	178
入館者数	1,214	1,687	217	331	88	414	628	36	28	14	50	4707

◇平成10年度　関西大学博物館公開講座「考古学入門講座」―考古学から見た家と集落―の開催
10月31日㈯から11月28日㈯まで毎土曜日５回の講座を行い、述べ930名の受講者がありました。

◇平成10年度　博物館購入資料
・インド祇園精舎遺跡沐浴池模型
・インド舎衛城遺跡発掘
「地母神」レプリカ

◇平成10年度　博物館受贈資料
・復元銅鐸及び鋳造工程資料
（詳細については『千陵』第37号で紹介）
・インダス出土土偶・土器片　４点
・インダス印章シーリング　５点

◇平成10年度　博物館収蔵資料の補修
故末永雅雄名誉教授が復元された、古墳時代の甲冑の補修を４年計画で行います。
本年度は「鉄三角板革綴衝角付・短甲・装具」（写真）の補修を行い、完成しました。

◇平成11年度　関西大学博物館企画展ならびに博物館講座の開催について
平成11年４月５日（月）～５月15日（土）の間、企画展「山村の豪農―園田家の世界―」を第２展示室で開催します。
また、４月10日（土）午後１時から３時まで、千里山キャンパス第１学舎第３会議室で博物館講座を同テーマで行います。演題及び講師については次のとおりです。
「高橋至時と伊能忠敬」　関西大学名誉教授　有坂隆道氏
「園田家と園田多祐」　関西大学大学院生　常松隆嗣氏

編集後記

『阡陵』第38号をお届けします。執筆していただきました先生方に感謝申し上げます。
また、下間頼一名誉教授より、インダス出土の土偶等をご寄贈いただきました。厚くお礼申し上げます。詳しい資料紹介は『阡陵』第39号で行う予定です。
なお、３月末をもって、薗田香融館長が定年のため退任いたします。在任中の関係各位のご支援ご厚情に感謝いたします。

表紙は「勾玉」です。勾玉は縄文時代の遺物にみられるように、動物の歯牙に穿孔して装身具に用いたものがその起源と考えられていますが、その後弥生時代を経て、古墳時代には硬玉製の勾玉が発達しました。
〔上〕は瑪瑙製の勾玉で形態に若干の相違があります。右端の最も大きい勾玉は長さ4.6cm、腹部径1.3cmです。〔下〕は濃緑色を呈する碧玉製勾玉で、右端の小さい勾玉は長さ2.7cm、腹部径1.0cmです。
いずれも出土地は不詳です。

関西大学博物館彙報　No.38　平成11年３月31日　発行
関西大学博物館　編集
ナニワ印刷㈱　印刷